

フェラーリで男を磨く!?

今月号は、約2年ぶりとなるフェラーリ・V8モデルの特集だ。UCGは中古車情報誌だから、もちろん手に入るため、乗るために役立つ現実的な話が柱になる。つまり、眺めて楽しむ記事ではないわけだ。

「えっ、フェラーリを買うなんて無理!」という方も少なくないと思う。確かに安い買い物ではない。でもいまや、500~600万円の予算があれば、328/348やモンディアルが射程圏に入るのだ。ということは、200万円くらいの頭金があれば、会社勤めの方でも無理なくローンを組めるのではないだろうか。

そこで気になるのは維持費のことだろう。毎月のローン支払い額を抑えたところで、多額のメンテナンス費用がかかってしまえば、フェラーリを楽しむどころではなくなってしまふ。しかし、状態の良いものをさえ選べば、それだって問題は無い。いや、なくはないが、使い方さえ心得ていけばやっていけるというのが、今回のフェラーリ特集の基本姿勢になる。「憧れを現実に変えてくれるのが中古車」、これはUCGを創刊する時に掲げた“御旗”でもあるのだ。

いっぽう、経済的に購入可能だとしても、「自分はフェラーリのドライバーズシートに座れるだけの器量を持っているのか?」、そんなことを考える方も多いと思う。フェラーリの場合、車両価格や年式などは関係ない。安かろうと古かろうと、跳ね馬のバッジはクルマ好きにとってそれほど重たく神聖なものなのである。

ただし、どんなに貫録たっぷりの人でもいきなり自然に乗りこなすなんて、まず無理だ。最初は“背伸び”をすることになるのだろうが、2年~3年とつきあっていくうちに自然と馴染んでくるのである。そう、“跳ね馬”が乗る男を育てるのである。運転マナー、ドライビング・テクニック、立ち居振舞……、そして人格さえも磨いてくれるクルマなのだと話すオーナーが多い。巻頭の座談会に参加してくれたモータージャーナリストの清水草一さんは、それを「男を磨く修業」と言っていた。31歳の頃からフェラーリを乗り継いでいる彼の実感なのだろう。

フェラーリは、社長さんやIT長者のための乗り物ではない。会社勤めの方にも、ぜひ「修業」にトライしていただきたい。フェラーリスタたちは口を揃えて言う。絶対に後悔させないクルマだよと。

野田義彦
YOSHIHIKO NODA

情報誌の編集部を経て、創刊準備号からUCGに加わり、第2特集のちょっと古いクルマを中心に担当。03年4月号からUCG編集長を務める。現在の愛車はランチア・テーマ8.32。1959年生まれ。



Illustration: 谷山彩子